修士論文（修了制作レポート）論文要旨

人間と金属生命体の関わりをテーマにする制作研究
～自主制作漫画『Storm Brave!!』のメディア展開を通して～

岩手大学　大学院　総合科学研究科
総合文化学専攻 アート発信プログラム
G0219001 梅木　結一花

初めに、筆者は、現代で人間の生活を支えるロボットを紹介し、アニメーションや漫画作品におけるロボットと人間の関わりを先行作品『トランスフォーマー』シリーズや『勇者』シリーズ、『クロスアンジュ～天使と竜の輪舞（ロンド）～』から関わりの形態について考察した。先行作品におけるロボットと人間の関わりはロボットを武器や兵器として開発し戦闘に利用する、外敵をロボットと人間が協力して撃退する、戦力として人間がロボットを開発し、精神を持つ仲間として親交を結ぶなど多岐に渡る。しかし、ロボットのように機械や金属でできたキャラクターはその金属的要素を強調して表現される事で無機質さや冷たさといった印象を与えやすい。この事を考察した筆者は、人間と相対するロボット達が、地球とは全く異なる環境で誕生し、文明を発達させた金属の体を持つ生命体であったと仮定し、そのような「金属生命体」は人間をどのように解釈し、接しようとするだろうかというテーマ設定に行き着き、そのテーマに基づいたイラストレーション、漫画作品の企画と制作、作品の発信などを通して考察を始めた。

本文Ｉでは金属生命体について考察し、本研究における金属生命体の特徴の設定を解説した。また、現実に金属生命体と呼ばれる生物は存在しない事を述べ、ロボットやＡＩが感情や精神といった性質を獲得する可能性と、感情や精神を得ることは生命を得る事と同義になりえるのかという考察を始めた。カレル・チャペックの『ロボット（Ｒ．Ｕ．Ｒ）』や『アトム・ザ・ビギニング』などの作品を参考にしながらロボットが感情や生命を持った描写の表現やそう判断する条件に付いて考察していきながら、現実に存在する機械やロボットが感情や意思を持つ可能性を民間伝承における信仰や『勇者警察ジェイデッカー』のワンシーンなどを参考に機械やＡＩの精神の有無の判断する基準について考察し、本研究作品の題材に金属生命体と人間の関わりを設定した理由について述べた。その後アイザック・アシモフの『われはロボット』、『クロスアンジュ～天使と竜の輪舞（ロンド）～』に登場したロボットの挙動を基に人間と変わらない情緒があるかのような印象を与えるロボットについて考察する。

本文IIではロボットと人間を扱う視覚文化の状況を先行作品に登場するロボットの性質の違いと、人間と関わる目的の違いによるデザインの相違について考察した。また、人間にそっくりな外見を持つロボットやアンドロイド、体の一部を機械化したキャラクターの例を挙げて比較を行った。

本文Ⅲでは教育学部芸術文化課程美術デザインコース在籍時に金属生命体と人間の関わりをテーマとして制作し、卒業制作展にて展示した修了制作以前の作品を紹介した。

本文Ⅳでは修了制作についての研究課題に基づいた制作作品とその作品制作の主題について述べ、金属生命体と人間を主題に『Storm Brave!!』と題した作品を企画し、その企画を基にイラストレーション作品や、それを用いた小説作品、１～４コマのショートショート漫画作品の制作したことと、それらを発信する活動としてＳＮＳでの作品公開や、展覧会での公開について活動報告を行い、その中でイラストレーション作品の制作工程の解説を行った。

本文Ｖでは研究課題の実施において金属生命体の概念の再考に始まり、人間と金属生命体の関わりについての異文化交流的な面と思考実験を行いながら、作品の中で人間と金属生命体が交流する中で主軸となる要素について考察した。また、金属生命体キャラクターのデザインや設定を考案する中で類似する機械生命体の概念の相違点についても考察した。

本文Ⅵでは修了制作として制作したイラストレーション作品や漫画作品の内容について述べ、作品の中で金属生命体と人間の関わりによって見いだされる課題や疑問についての改善を目指す様子を表現する目的や、これらの制作活動の中で生じた課題も明らかにし今後の活動の方針についても解説した。

結文にあたるⅦでは本論において作品制作を行う前提として考察してきたロボットと人間の関わりと、ロボットの精神の獲得の可能性の有無についてまとめた。それらを踏まえて今後の作品の中で表現すべき内容や、動画制作など新しい表現方法への挑戦など今後の作品制作への取り組みの方針についてまとめる。